

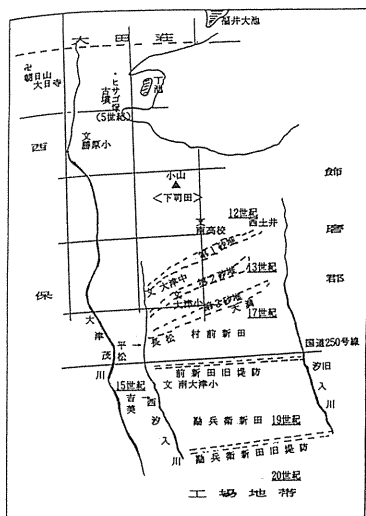


『大津区』をたずねて

大津茂川と東汐入川に挟まれ、旧揖保郡の東南端に位置するこの大津の地は、かつて三本の砂堆が東西に伸びる海であった。この砂堆を巧みに利用して堤防となし、北から南へと広大な土地を拓いていく過程が大津千年の歴史でもある。

「播磨国風土記」の開拓説話にはじまり、新田郷から福井荘へと進む。福井荘は現大津区・勝原区・網干区と一部太子町に及び、氏神魚吹八幡神社の氏子24か村の範囲である。当荘の文献の初見は仁平2年（1152）のことで領主は藤原頼長であったが、頼長はこれを興福寺に寄進。間もなく起こった保元の乱によって頼長が戦傷死すると勝利した平氏がこの地を得るが、短期間に終わった。平氏政権の後は後白河院領となり、高野山に寄進されることになる。この時、荒廃していた洛西高雄の神護寺再建に努めていた文覚は院に懇請し当荘を神護寺領にすることに成功（1185）。以後、福井荘は荘域を拡大しながら荘園時代が終わるまで神護寺領として続く。

文覚時代の当荘は凡そ400町、大津茂川を境に東保と西保に分かれ東保の大部分は大津の地であった。地図で示せば姫路南高等学校の南側に連なる畠地（第1砂堆）を超えて大津小学校、大津中学校を含む畠地（第2砂堆）辺りまで開拓が進んでいた。一方、大津茂川下流域左岸の平松や吉美は、同川や揖保川が流出する土砂によって寄洲が形成され開拓が進んでいた。



大津区砂堆図

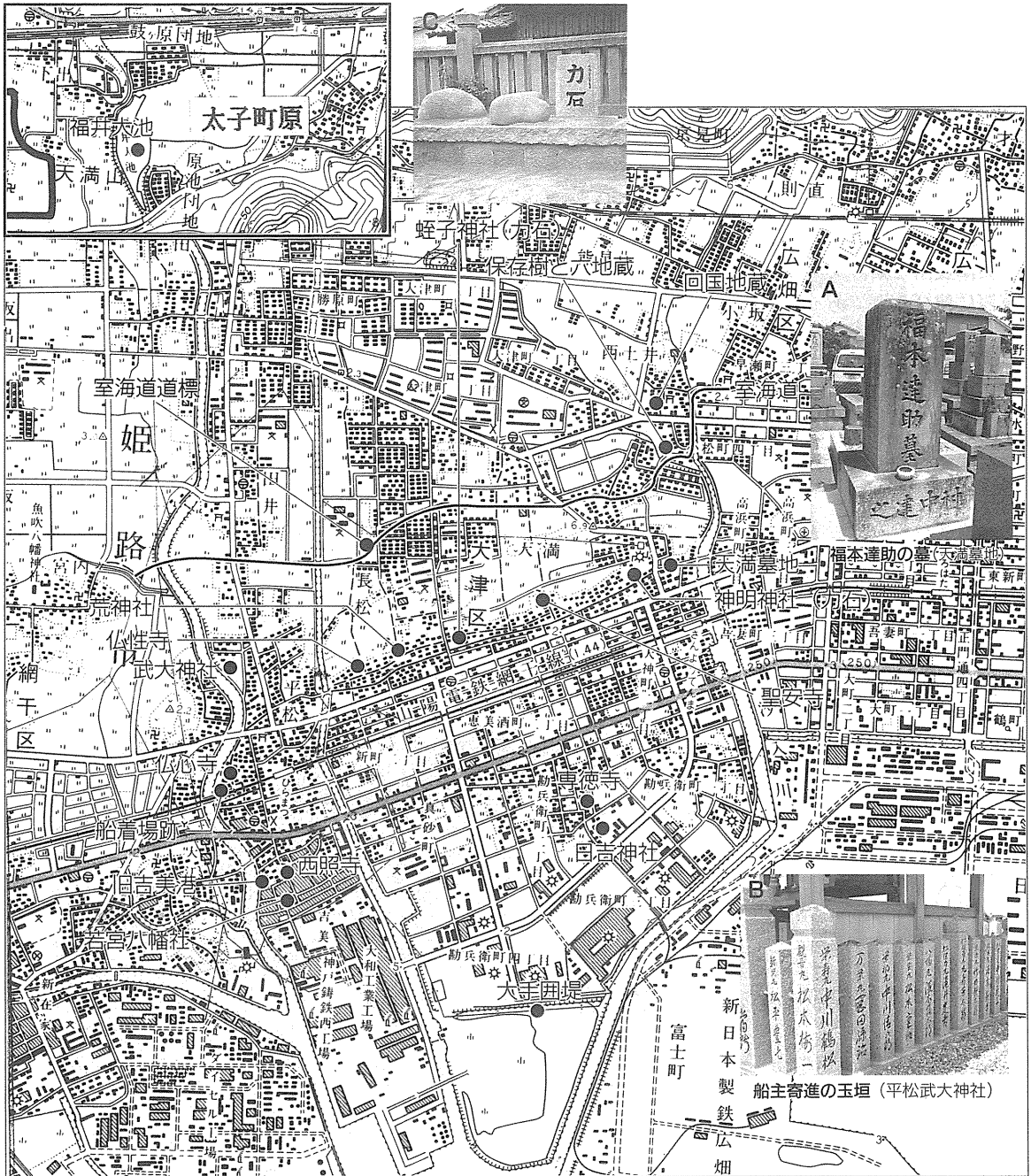


大津区（部分）航空写真

武家政権の荘園への進出は、荘園の性格を変化させるが、福井荘の開拓事業は飛躍的に進み、15世紀末には800町と倍増し、荘内28か村の村名も文献に現われる。天満や長松村の集落は第2砂堆上にあり、南の第3砂堆に向けて開発が進められていた頃である。

江戸幕府成立の前後には、集落を第3砂堆上に移し（現在の天満・長松集落）、寛永期には、国道250号（浜国道）の南に土手を築き、数十町の新田開発に成功、そして、江戸末期の最後の新田開発が勘兵衛新田である。新田面積100町余、明治以降も開発されて100数十町にも及んだ。

昭和に入ってから埋め立ては新日鉄をはじめとする大企業による工場建設となって播磨臨海工業地帯の一翼を担うことになる。



以上のように、大津の地は古代より現在に至るまで海を拓いて豊かな土地を造りあげてきた。しかし、福井荘東保の田地を潤すに足る大川はなく溜池に頼らざるを得なかった。

この溜池こそ太子町原にある「福井大池」である。池の歴史は古く8世紀にも遡る。文覚が当時大田荘（福井大池の所在地）を支配していた橋判官定康に送った書状に「大田庄内にあるこの池は福井庄の田を養って400年以上もたっている」「この池を干拓してわずか4町か5町の田を造ろうとして福井庄の田170余町を干してしまうのは道理にあわぬ」と判官に抗議する「神護寺文書」が残る由緒ある池だ。荘域が拡大するにつれ池床の拡張も行われた。大池の水系下にある池郷（池組）は初め10か村のちに7か村となって現在に至っている。江戸期の大池は周囲1300間、東西300間、南北420間、深さ4尺～2尺7寸5分。文覚時代からあった「水論」はあとあとまで続く。大論争となった宝永の池床争論、嘉永の土砂捨場争論など数多くの記録が「天満村文書」としてのこっている。

福井荘と共に生き続けたこの池も池郷の急速な都市化によってその価値を問い直す時期となった。太子町との間で「福井大池の将来を考える会」が結成され、多彩な機能を持つ水資源として光りがあてられようとしている。

姫路城主池田支配崩壊後の大津は分割支配が続く。西土井一天領(預地)、天満・長松一丸亀藩、平松一新宮藩と竜野藩の相給地、吉美一林田藩、勤兵衛一預地というように。

明治22年、大津茂川の川名から名をとり大津六か村が成立。明治29年、揖保郡大津村。昭和21年、姫路市大津区。昭和58年、南大津小学校創立により南大津校区5自治会、大津校区6自治会となり合わせて戸数5,500余戸。

一面の田園であったこの地区には、目に見える文化財は少ない。しかし、千年を要して築きあげたこの土地、その土地に刻まれた先人の開拓の魂を読み取るならば、これに勝る文化財はないであろう。

西土井 揖保郡と飾磨郡の境界になる汐入川の右岸に位置し、姫路城下と室津を結ぶ室海道(室津道)が集落の南側を通り天満へと続く。村の中央に「享保」の銘をもつ回国地蔵がある。市指定保存樹「エノキ」の老樹がそびえる墓地には享保14年(1729)の年号をもつ六地蔵がある。(文化財見学シリーズ13参照)

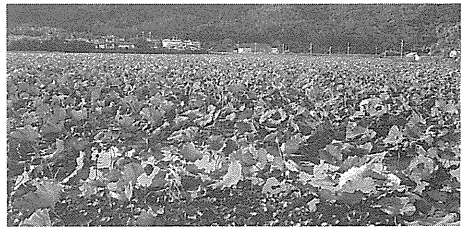
天満 天満地内のほぼ中央を室海道が東西に走り、海道北側に第1砂堆が確認され、これより以北は福井荘の原点となった地域である。海道の南には第2砂堆が畠地となって連なる。この砂堆の一部を発掘調査した結果、室町期の土坑跡や貝塚、土器などが出土した。この南の第3砂堆が江戸時代からの集落となり現在に至っている。

集落の東はずれに墓地があり、大津小学校の前身満教小学校(明治7年)教師村上東庵の墓(門弟建立)、徴兵制実施後、初めて戦争犠牲者(西南の役)となった三木浅五郎の墓、明治15年当地方を襲った大洪水の犠牲となった村の指導者福本達助の墓(村中建立)などがある。

集落の東西に各々神明神社、蛭子神社があり、秋祭りの宵宮に力石をかつぐ行事が今に残る。村の中央に浄土真宗本願寺派聖安寺があり、丸亀藩主二代の位牌を安置する。

長松 天満の集落続きで長松に入る。村内に元禄年間(1688~1704)字惣利に祀られていた荒神祠を字村屋敷(現在地)に移し、社殿を建てた荒神社がある。寺院は浄土真宗仏光寺派の仏性寺がある。

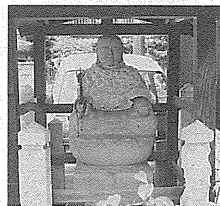
村北を通る室海道はその原形がよく残っており、大津中学校東側に道標が自治会の手によって再建された(平成6年)。天保年間(1830~1844)に建てられた旧道標は移設保存されている。西汐入川には、かつて二重の水門が在り、樋門の外は入江となって船着場となっていた。



福井大池 (太子町原)



第1砂堆 (県立南高等学校の南)



回国地蔵



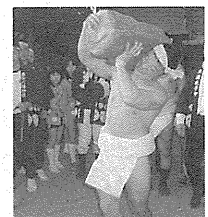
保存樹「エノキ」と六地蔵



第2砂堆発掘の状況



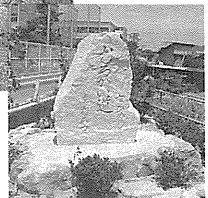
神明神社力石



力石を担ぐ



室海道の面影

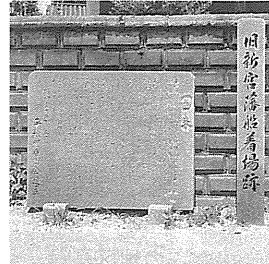


道標

平松 西汐入川を渡って平松に入る。大津茂川の左岸に立地する当村は良好な港湾をもち、新宮藩の年貢積み出しの藩船や村民の帆船で港は賑わったが、今は埋め立てられ「旧新宮藩船着場跡」の石碑が建つのみで昔の面影はない。港内にあった金比羅宮は武大神社（荒神）境内に移築されたが、その玉垣に多くの船主・船名が刻まれている。寺院に真宗大谷派仏心寺が村の中央にある。



明治44年の吉美港



◀旧新宮藩船着場跡の石碑



◀林田藩船手形

吉美 平松を南に下ると吉美。古くは「君ヶ浜村」と称され、中世から近世にかけて古文書を蔵する安積家文書は有名である。

大津茂川と揖保川分流網干川の合流点に位置する当村は平松と並ぶ良港をもち、林田藩役人の常勤する蔵屋敷や藩主のお茶屋もあり、回船問屋が軒をつらねていたが今はその面影はない。

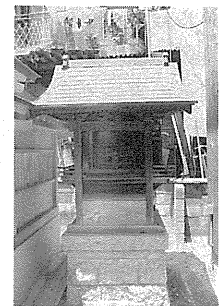
村内に由緒ある若宮八幡宮があり、寺院に「君浦由來記」（安積家文書）にその創建の由来が記される浄土真宗本願寺派西照寺がある。

勘兵衛 瀬戸内海に面し、レンコン栽培で有名な勘兵衛は天保13年（1843）から嘉永6年（1853）にかけて大干拓事業を成功させた新田村である。新日鉄の進出に伴い多くの中小工場が建ち、村は一変したが今にその一部を残す石積みの手廻り堤は貴重な文化遺産として、開発者三木勘兵衛の名とともに忘れることができない。

村内にある日吉神社は安政元年（1854）、三重県渡来郡より勧請されたという。同境内に開発者を祀る勘兵衛神社がある。寺院に浄土真宗本願寺派専徳寺がある。



若宮八幡宮



勘兵衛神社
(日吉神社内)



勘兵衛新田大手廻り堤